

(Functional Independence Measure) の歩行・階段の項目をパスに組み込み、実際に入力フォームを作成してパスの改訂を行った。現在各施設の担当者にて入力作業を行っていただいているところであり、これによって何とか今後の解析を進めていけないものかと考えている。

新しい退院基準に沿って維持期への移行が進めば、手術から回復期リハビリ施設退院までの入院期間は今後短縮していくものとする。また維持期リハビリテーションの需要とともに、介護まで含めた患者中心の医療福祉供給体制のあり方が明確になってくるものと思われる。

おわりに

平成18年度の診療報酬改定において、地域における医療機関の連携体制として、地域連携パスの活用が評価されることとなった。

連携パスの目指すものは、連携医療の標準化によ

る医療の質の向上である。本パスは、患者用パスともセットで作成され、その説明が治療開始前に行われるため、連携医療への患者の不安解消にも大いに役立っており、施設完結型から地域完結型医療へと進みつつあるわが国の医療に必須のツールとなるものと思われる。今後さらに解析を進め、本疾患患者の入院経過の全体像を明らかにし、連携パスの改良を通して、良質で効率的な地域医療を目指していこうと考える。

[文献]

- 1) 野村一俊. 医療連携とクリティカルパス 第2世代へと進化した大腿骨頸部骨折の連携パス. 実験治療 2004; 675: 128-33.
- 2) 廣瀬 隼, 野村一俊. 地域医療連携標準化の新たな取り組み—大腿骨頸部骨折に対する電子化連携パスの開発とパリアンス分析. 整・災外 2006; 49: 1425-33.

今月の

用語

隣に伝えたい 新たな言葉と概念

【rt-PA】

- 英 recombinant tissue plasminogen activator
- 略 rt-PA
- 和 遺伝子組み換え型組織プラスミノゲンアクチベータ
- 同 血栓溶解療法

〈解説〉 元来、組織プラスミノゲンアクチベータ (t-PA) は生体内に存在し、血管内皮で産生され血中に分泌されるほか、正常組織にも広く分布している血液線溶系活性化酵素である。血栓上でその活性を発現し、特異的に血栓を溶解する働きを示す。これを遺伝子組み換え技術で製剤化し、臨床応用したものが rt-PA である。rt-PA にも種類があるが、半減期の短い alteplase を発症 3 時間以内の虚血性脳卒中患者に投与し、1995年、米国でその有効性が証明され、本治療法が承認された。わが国ではこれに遅れること10年、2005年10月から rt-PA 静注療法が保険適用となった。本治療法の普及は、脳卒中医療の体制や考え方に大きな変化をおこしている。脳卒中救命の連鎖としての7つのD、すなわち患者発見 (Detection)、出動 (Dispatch)、搬送 (Delivery)、病院到着 (Door)、情報 (Data)、決断 (Decision)、投薬 (Drug) が迅速に流れるようガイドラインが示され、発見から到着までを2時間、病院到着から治療開始までを1時間以内で実施できる救急医療体制と専門センター化が整備されつつある。ただし現状では急性期脳梗塞全体の3%にしか適用されていない。また経過良好例は30-40%程度で、適応を逸脱するとかえって症状を悪化させることから慎重かつ専門的に治療することが必要である。しかし、これまで治らないとされてきた脳梗塞にとって画期的な治療法であり、新たな発展が期待されている。

〈関連分野〉 脳卒中、循環器病学

(九州医療センター 岡田 靖)